

7年間、白血病と闘いつづけた  
学生生活だった。

3月25日——きょうの卒業式に、小野博史さんは、だが姿を見せることができなかった。しかし、式場のみんなと一緒にいるだろう。父親の腕に抱かれて。遺影のなかで、いつもの穏やかな表情を浮かべて。

悲しみは突然だった。2月12日、小野さんは、26歳というあまりに短い生を閉じた。

昨年11月に再発、それでも入院を年明けの1月14日まで延ばしたのは、卒業試験に備えるためだった。

「病氣と闘って社会復帰したい。そのためにも、卒業をなんとか

**白血病と闘い…遺影の卒業式**  
小野博史さん

商学部

音楽が好き。CDなどと一緒にが部屋に残っている。

1年の夏バイトして買い求めたのだという。直後の発病だった。始終手入れてピカピカの、しかしついに一度も吹かれることなかったサックスである。

卒業式——父・功さんには特別な思いもある。68年、同じ商学部卒。その年、学園紛争で卒業式は吹き飛んだ。「ふと思うんですよ」と父は話した。

「卒業式を知らないおやじに、息子が一緒に参列する場を与えてくれたのかな、とも」

電話の声に、思いがあふれた。



今月4日のことである。

「大変にありがたいことでした。博史もきつと喜んでるにちがいない。母・彰子さん(54)は言葉が詰まらせた。

発病したのは入学の年、97年夏である。いらい計8回に及ぶ入院。5年前、骨髄移植を受けた。ドナーは二つ違いの妹、智子さんだった。

「穏和で、家族みんなのことを考えるような息子でした。将来は白血病のことを訴えていきたい、と言っておりました」(彰子さん)。本人の遺志に添い、献体されたという。

**「モノづくりへのロマン」**

この熱き思いが原さんの原動力となっている。

「エンジニアになることを大学に入学するときから決めていた」という。電気電子情報通信工学科に進んで、勉学を重ねつつ、さらに「自分を追い込むことで自分の力を強引に発揮させたかった」と、インターシップで現場を体験する。そこではIC(集積回路)に自由に触れることができた。ICへの興味はそれからである。

**「SONYエンジニア」熱情と自信**  
原豪之さん

理工学部

熱意を胸に、4月からIC

ICは携帯電話、コンピュータなどの頭脳の役割をする中心的存在だ。もともと、我々の眼にはその働きが見えない。いわば、内側で支える縁の下の力持ち。逆に、そんなところにも魅かれたという。

理系の学生は大学院進学が就職かで選択を迫られる人が多い。原さんは「2年後には修士修了と比べて負けないぞ!」との気概で就職を選択。

見事に第一志望の企業への採用内定を果たした。

SONYである。

「企業の理念と自分の

考え方が合致した」と原さんは志望理由を語る。

「安ければいいというものではない。自分が心から欲しいと思うモノであれば、多少高くても買いたいと思うはず。自由な発想でオリジナルティ溢れる製品を創りたい」

卒業研究ではアナログ信号をデジタル信号に変換するADコンバーターの研究に没頭した。朝早くから終電の時刻まで時を忘れるほどに。「自分が好きなことだからやっているだけですよ」

熱意を胸に、4月からIC担当のエンジニアへの旅立ち。「プロジェクトX」が描くように、世界を相手に戦い続けるエンジニアたちが日本の製造業を、大いなる夢とともに縁の下から支えてきた。脈々と受け継がれてきたエンジニアの熱情が、原さんの全身から伝わってくる。

日本の製造業はいま中国の勢いに押され、SONYの低迷も目立つ。だが、技術力が失われたわけではない。「これだから本場の勝負です」

力強く、言った。

(原田)





2 年次が終わった春休み、インドのNGOで2カ月のインターンを経験。3年次の1月からは、国連人口基金（UNFPA）東京事務所でボランティアとして働いた。中学時代から南北問題に関心があつたという。その頃からすでに、視線は海外へと向けられていた。「南北問題を解決するヒントを調べてみたい」と総合政策学部政策科学科に入学。サークル活動や各種セミナー、勉強会への参加を通じて、「開発援助」について学んだ。大学に入って2年目の秋。「いままで学んできた問題は実際にはどのようなものなのか。机上の学習だけではなく、開発援助の現場も見てみたい」と思うようになる。そんななか目に留まったのが、「海外インターシップ」だった。

「開発援助の現場を支えるNGOへのインターンであれば、問題の本質を肌で感じることができるとは思いません。そう思ったんです。運よく、学内で活動するアイセックという留学生受け入れ、送り出しを行う組織が、海外インターンを企画していました。すぐにそれに申し込

みましたね」  
インターン先は、インドの農村地帯にあるNGO。そこで、彼女は価値観が大きく変わる「現場」に数多く出合つた。

こんなエピソードがある。彼女の参加していたNGO団体が、インドの農村地帯で、女性たちに無料で健康診断を行った。だが400人ほどの女性のうち、実際に健康診断を受けたのは、たった40人余りだったのだ。

「インドではまだ、女性は家族のなかでは最底辺なんです。多くの場合、病院のサービスを受ける機会を与えられていない。だから彼女たち



は、なぜ健康診断を受けなければいけないのかさえわからない。自分のいる状況に対して、無知なんです」

この「現場」は、机上では学べないものを彼女に教えてくれた。「インドに行く前は、収入が低いことが原因で、農村住民は適切な医療サービスを受けられないのだ

### 開発援助の「現場」で見たもの 体験を通して、英国大学院へ

総合政策学部 村上沙由理さん

と思っていた。でも、問題はそれ以前にあることを知りました」

インドでのインターンを終えたあと、「日本人としてなができるのか」を考えるようになったという。外へ外へと向かっていった視線は、ここへ来て、自分の生まれ育つた国へと向かった。日本という島国から飛び出したことで、逆に「二ホン」を意識するようになったのだ。

日本の「ハコモノ援助」と呼ばれる開発援助にも疑問を投げかける。「いまの開発援助のやり方は、途上国が何を欲しがっているか、という視点が抜け落ちている気がしま

す」

卒業後はイギリスの大学院に進み、「開発経済学」を徹底的に勉強したいと思っている。

将来はどういった仕事を？と、質問すると、「援助国と被援助国の仲介役になりたい。理論だけでなく、現場を通して先進国、途上国、双方の価値観を知る仲介役に。将来的には、その分野の人材を育成する立場になれたら、と思います」

決して目を逸らさず、気負うことなく、話した。夢というよりも目標と呼ぶべき、はつきりとしたビジョンだ。

彼女のこんな一言が印象に残っている。

「私はたまたま日本という先進国に生まれた。たまたまなんです。そう考えると、途上国の人たちのことも他人事だとは思えません。どの国に生まれるかは、その人に原因があるわけではないんですから」

この他者を思いやる気持ち、目標に向かってまっすぐに突き進む、彼女の原動力になっているのではないだろうか。

(長野)

# 卒業

業しても、彼らの大学生活の足跡は多摩の街にしつかりと育つだろう。斎藤さんは総合政策学部・細野ゼミのゼミ長、黒川さんは副ゼミ長をつとめた。ゼミの中で、「ネットワーク多摩」という学術・文化・産業のネットワークを活かして学内外で活躍したコンビである。

たとえば、多摩3地区のクリスマスイベント。大学3年次に取り組んだ企画だ。「先輩の代から、多摩ゼンターでのイルミネーションを使った企画はスタートしたんです。それをもっと広く、立川、八王子を含めた多摩地区の広域連携企画にしたかった」(斎藤さん)

新企画を実行に移すため、市役所や商工会議所、商店街の人たちと何度も交渉した。簡単に費用を出してもらえず苦労したが、「学生にしかないもの、時間と体力と熱意で費用は商店街の人に出してもらいました」。大きな仕事を成し遂げた満足感が二人に共通する。

多摩の新しいイメージづくり。斎藤さんは言う。「まず、学生が動く

ことこそが大きいと思うんですよ。そこから市民に広がっていく」

4年次には、フットサル大会を開いた。「ポスターを貼ったり、運営スタッフを集めたりと、企画からすべてを学生の手で。大変な苦労でしたけど」(黒川さん)

結果、96チームの募集に、なんと140チームもの応募があった。

苦労した分、感動もまた大きかったようだ。

## 「ネットワーク多摩」の先頭で

総合政策学部

斎藤拓也さん  
黒川和人さん

「このようなイベント企画ができて満足だし、大学は外に出る機会を与えてくれた」と、二人

ともこの経験を一番に挙げて充実した日々を思い浮かべる。

4月から、斎藤さんは鉄道会社へ。「独自性のある町のイメージを作りたい」と語る。黒川さんは教育系の会社で働き、「将来は地域に密着したコミュニティとしての学校を作るのが夢」という。

それぞれに大学時代に手がけた「夢のつづき」が広がるのである。

(関坂)

# 感謝

・信頼・責任・誇り」

アメフト部の監督が試合のたびに、選手たちに繰り返す言葉だ。四方さんはこの監督のもと選手として3年、残り1年は「主務」をつとめた。

選手と主務、ハカリにかけると? 「やっぱり大きいのは主務ですね。とにかく大変でした」

笑顔を一瞬しかめた。

「予算から交通手段、合宿の手配、グラウンドの使用申請、練習試合の相手との交渉まで。とにかく目まぐるしい1年間でした」

例えば、その1日。4時半に起き、運送屋のアルバイトから始まる。8時に帰宅後、身支度をしてから練習開始1時間前の10時に大学に向き、練習の準備。ミーティングを含め、夜10時までには選手と共に。

## アメフト・SAMURAI

経済学部

四方弘二さん

四方さんの就職先はJR東日本。職種は「運転手」だ。

「少年野球の監督がいい人で、その方がやっていた仕事なんです。それに昔から乗り物が好きでしたからね」

熱い。在校生へのメッセージも。「野球をやっていた頃、見逃し三振が一番怒られた。無理だと思わず、あきらめない。仮に駄目だとしても失敗から学べる。だから逃げるな。見逃し三振だけはイケナイよ(笑)」

「でも勉強になりました。OBの方々の物心両面の援助にも助けられて。信頼を大切にし責任と誇りを

持つて生き、感謝の心を忘れない……自分は一人で生きていくわけじゃない、と感じました」

(三神)



大 学生でビジネスの世界に飛び込む人はいる。しかし、2つの店を持つ人はそうはいない。それも、バー2店舗展開——。

聖跡桜ヶ丘に「SOJEN」、湘南台に「MAYBE ME」。エネルギーに満ちた人だ。

中央大学付属高校時代、アメフトで全国準優勝。「めっちゃめっちゃ練習がきつい環境だった」そうだが、頑張れば頑張った分の成果がついてくることを知った。

「何かをやるときには一生涯命やらなきやいけない」

大学2年のときにフィナンシャルプランナーの資格を取った。その経験を生かして、三井住友銀行でインターンシップも体験した。その中で「周りの人のモチベーションが高い



環境で働きたいと実感した」という。

先輩の助けもあって3年の夏にバーを開いた。

お酒好きで、実家に集めたりキュールの数は70本超。湘南台の店には200種類以上のカクテルがあるという。店と店の往復であまり家に帰らなくなった。たまに母から電話がある。「あんた生きてんの」

遊び心を店に反映させる。卓球、ファミコン、ダーツがあるバー。あまり聞いたことがない。「やりたいことをするために」

### 在学中にバー経営の起業家精神

商学部

### 篠沢和男さん

プトにいかに肉付けするかという作業が必要。いろんな人にアイデアを出してもらっています

就職先はリクルートコスモスという不動産会社に決まった。

大学生生活が終わる。「学年を追うごとに自分の成長が実感できたし、形としても残せた。自分のできるものが広がっていった。可能性は無制限だ」と。あと、1年あるなら、焼鳥屋をやりたいな

4年間では足りないほどの、実のある大学生活。

(小野)



「や」つば卒業だね。苦労しました。

てか今年も卒業できるかわからないのですが……」

大変だったことは？ と聞くと、こんな答えが返ってきた。これが昨年。めでたく「卒業」のこの日がやってきたのである。

「自分が3年の時の1年生が、気がついたら同じ年になってしましましたよ」

総合政策学部が学ぶこと6年の、鈴木誠一郎さん

### 気球に没頭6年間

総合政策学部

### 鈴木誠一郎さん

「原因ははっきりしています。熱気球です」というわけである。「やりすぎました」と。

2年のとき、たまたま友達を持ってきた気球サークル(LARK)のピラが縁の始まり。いろいろ6年、いまや気球のパイロットを育てることができるとインストラクターになるまでの腕前だという。

大学生生活で得たものは？

「気球のライセンスと、ありきたりですが友達ですね」

勉強の話は出てこない。「普段、うちのサークルは渡良瀬遊水地でフライトしているのですが、日本でも数のフライトエリアだから各地から

気球チームが集まってきます。また気球の大会に出かけては土地の名物をツマミにお酒も飲みながら、いろいろな友達ができました」

年齢も職業もいろいろ。他大学生はもとより、世界記録や気球の世界一をねらう人、道楽で気球をやっている社長から親と一緒にきた3歳ほどの坊やまで。大会会場も北は北海道から南は九州まで、そして海外の大会にも日本代表チームのクルーとして参加もしたそう。

大会参加の費用はバカにならない。「海外だと30〜40万かかるから、バイトも大変だった」そう。

なにか「卒業なんかいつだってできるさ」みたいに割り切ってパルーに賭ける、おおらかなココロ。「中大生」ではなかなかお目にかかれな

いタイプ、でしょうね。

卒業後は？

「気球を続けられる仕事に就こうかな」と考えています

というわけで、これからは気球一筋なのである。

人生というターゲットにマーカーを投下する。一番近い勝利者がいつとも「勉強一筋」派とは限らない。

(町田)

# 社

会保険労務士の父を見て、「法律は楽しそう」と小学校から司法試験を目指し、法律学科に入学。

そして、司法試験受験団体の「正法会」に入会した。法職講座も受講し、「法学会」では、2年次、「末川杯法律討論会」で論者として2位を獲得。司法試験の勉強は順調だった

が、急ぎよ、白門祭実行委員会委員長(02年)を務めることに。

「法学会の代表として、学術連盟の常任委員をやっていたので

すが、2年の終

わり頃に白門祭の実行委員をやらな  
いかと誘われ、なぜか、3年の4月  
には、実行委員長になっていました。  
実は、白門祭実行委員会の仕事は、  
全く知らなかったんだけど……」

それから「学祭のための生活」  
新人生歓迎白門祭の準備のため、早  
速、5月には終夜を経験した。

「それから、会議での意見集約、  
企画受付、大学側への書類提出など  
で、ほぼ毎日23時まで大学に残った  
り、白門祭の1週間前からは、終夜  
で大学にいました」

すると、司法試験のほうは？

「司法試験の勉強は手をつけられ  
なかった。勉強は遅れるかもしれない  
けれど、せつかくの機会だし、大学  
在学中だけでなく、これからもでき  
るとは限らない経験だから、3年次  
は1年間、学祭に捧げたよ」

大学側と、酒類販売でやりあったり、  
白門祭当日には地割りした場所に他  
店が入ってモメたり、火事になりか  
けたり。ナンダカんだのトラブルの  
中で、日常生活も「多少の問題にも

## 学祭委員長と司法試験

法学部

小玉康喜さん

動じなくなったよ」と笑う。  
苦勞あればこ

そ、である。白門祭実行委員長はこ  
う打ち明けた。

「白門祭の最終日。充分すぎる使  
命の中、何とか無事に実施できた。  
涙をこらえるのが難しかった」  
普通とは異なる生活は、自分に  
とって幾重にもプラスだったという。

「さまざま角度で勉強し、貪欲に  
いろんなことを吸収して欲しい」  
後輩たちへのメッセージを残して、  
04年の司法試験の勉強の  
ため、「炎の塔」へ向かった。

(福田)

# 12

月某日、待ち合わせ場所に  
颯爽と現れたナイスガイ。  
手にはしつかり長さ約2メートルの  
棒を握りしめて。

「棒を持ち歩くのも稽古なので  
……」

昨年度白門祭実行委員会事務局長  
にして、棒術部に所属していた文武  
両道のお方である。

「棒術の創始者も中大のOBなん  
ですよ」

さすがに棒術  
部員というべき  
か、この日も棒  
で払い、薙ぎ、突くように軽やかに  
語ってくれた。そんな中に

「実は中大生全員が白門祭実行委  
員会の会員なんです。全然知られ  
てないけど(笑)。ふと、事務局長  
の顔がのぞく。

「大学で何か新しい事をやりた  
いと思って棒術を始めたんだけど、  
大学生活その1つだけっていうの  
もね。僕は高校の時も文化祭の実  
行委員をしていたんだけ

ど、3年生の時は受験で  
できなかったんです。だ  
けどやっぱりやりたかつ

た！って、後悔の嵐でね。だから  
大学では後悔しないようにやろうと  
思ったんです」

でも、棒術という武道サークルと  
白門祭実行委員会のかけもちは相当  
苦勞したのでは？

「合宿が連続したこともあったし、  
仕事が重なったこともあった。それ  
でも踏み出した以上は真剣にやるし  
かない。4年間両方やり遂げられた  
のは、やっぱり棒術と委員会の人た  
う」

## 学祭も突き払った棒術の人

法学部

白須桐紀さん

ちのおかげだね。こっちに専念、  
ということがで

きない僕は、必ずどちらかに迷惑を  
かけて活動してた。みんなの理解と  
支えがなかったらできなかったと思  
う」

ナイスガイの瞳が心なしか潤む。  
「事務局長と棒術部の経験から、  
どんな大きな組織でもやはり人が単  
位だとわかった。基本は人だとい  
うことを学べた4年間だったよ」

4月からは金属メーカーに就職す  
る。この経験知と4年間やり遂げた  
自信が、新たな棒となって、どんな  
困難もなぎ払っていくことだろう。

(酒井)



そ

れは2年生の春、練習中のことだった。

「気が付いたら顔が地面で。頭が血で真っ赤。結局、五針縫いました」

ね。——「ずいぶんあっさり言いますね。」

「ケガをいつまでも引きずったら、もう飛べない。それに、相手も責任を感じちゃう」

……多くの女性が憧れ、また多くの女性が踏み込めない、チアリーダーの世界。どうも、「ボンボン振って躍ってる」だけではないようだ。躍るのは、好きだった。高校から

始めたダンスも、大学外のスクールで続けようと

思っていた。転機は1年生の春、友人の紹介。

「練習を見た瞬間、入部を決めました。アツかった。だって、人が飛んでるんですよ!？」

大学スポーツを華麗に彩るチアリーダーたち。その中でも彼女は「トップ」。ダンスに合わせ、「人間ピラミッド」の頂点から空に舞う。

「小柄だから、1年からトップ一筋。全部覚え

てやろうと思ってた。何でも吸収しなかった。もう、がむしゃら」

そして迎えた2年の春。冒頭のケガである。地上10メートルから地面に叩きつけられた。

「一度怖がったら、二度と飛べない。仲間が受け取っ



てくれると信じて、自分の演技をこなすだけ。1センチでも空へ、それが

私の役目」

チームに溢れる信頼感は、週4回の猛練習から。大会前には「闇練(やみれん)」と呼ばれる自主トレを重ね、自宅でもビデオ研究を欠かさない。4年間の大学生活、一番長く過ぎたのは、ゼミ室でもバイト先でもなく、チームで。

野球、アメフト、箱根駅伝。試合の応援は年に20回超。

「応援も大事ですが、それは自分たちの舞台でもあるんです。振り付けを間違えたら悔しいし、リズムがずれても泣けてくる。日頃の汗がどれくらい輝くか、それを追求する場でもあるんです」

選手への声援と自らへの挑戦。彼女たち自身、ただの「応援団」ではなく、同時に「選手」だった。

3年でキャプテンに。

「先輩を引っぱってかきまわらない。体力的にも精神的にも一番キツかった。だからこそ、一番得るものは多かった」。自分のミスに悔し涙、チームの勝利に嬉し涙。練習と試合、そしてチームの運営に明け暮れた。

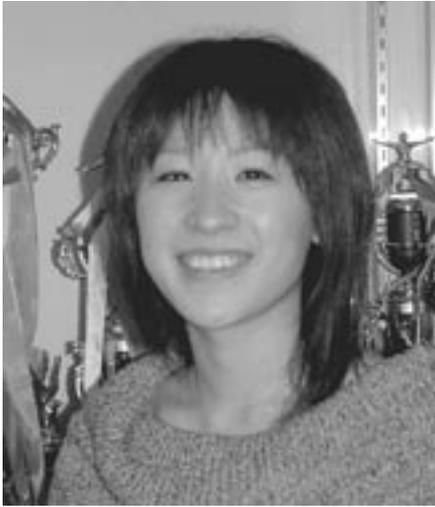
「自分なりにやってきた4年間を形にしておきたかった。やっぱり、色々ありましたから。笑ったことも泣いたことも」。引退と同時に指導員の資格を取った。就職先はスポーツクラブ。

「これからも踊りに関わって行きたい。小さくてもいいからクラスを持てたらな、なんて」

中央大学応援部チアリーダー「SPIRITS」。チームカラー、青。中大のスクールカラーだ。熱闘のフィールドから、ほんの少しだけ応援スタンドに目を。青い花はいつも、空に向かって咲いている。(渡部)

ホームページ <http://www.geocities.co.jp/Athlete-Spartan/5095/>

ホームページ <http://www.geocities.co.jp/Athlete-Spartan/5095/>



**中** 大硬式野球部マネージャーを4年間。会計・広報などの事務を着々とこなす。一方、文学部で日本史学を専攻。近世古文書に興味を持つ。

動きました。中大に優勝はないと分かっていただけ、延長11回に及ぶ投手戦。両投手の投げ合いは見ものでしたよ」

「ジミっ子なんです……」  
とおっしゃる志村繭子さんは、この日卒論を提出したばかり。2時間しか寝ていない。が、大好きな炭酸を飲みながら、終始笑顔。意外とガッツありそう。志村さんも、打ったり投げたりするんですか？

人間のドラマに、しみじみ感動する。日本史でも、庶民の生活が好き。卒業旅行も国内しか考えていない、と言った。

「別に、日本史とは関係ないけれど、場所はこだわりません。騒げれば好し」

「全くしません。高校時代にもマネをやっていたけれど、その時にタマ拾いをしたくらい。たまにタマに当たって痛かった(笑)」

「今では「遠慮のない」仲。地味だけど、たくさんの他大マネージャーと、

**野球部女子マネのほほえみ**

文学部

志村繭子さん

中身の濃い旅行になりそうだ。4月からSE

（システムエンジニア）になる。

「マネージャーって、部に役立つことを常に考えようとしている。顧客の要望にふさわしいシステムを設計するSEになろうと思った理由の1つ」

東都リーグは、春季4〜5、秋季9〜10月の平日。授業をうまくやりくりし(笑)、朝8時半には神宮球場に。アナウンスもするが、事務所に座してひたすら電話番が多い。

また、部のホームページ作りを任せられ、パソコンに強くなったこともプラスしたらしい。「硬式野球部ホームページ、ぜひ見てくださいね!」

「選手との接触はあまりありません。モテるのはチアリーダーのほう(笑)」

「そんなことより、」

「02年秋季の対亜細亜大戦に感

(江部)

「い つも笑顔」を座右の銘に、インカレ10連覇の達成、シドニー五輪日本代表も輩出した強豪「中大水泳部」を全面的に支えたマネージャー。

考えた時があった。それは一昨春秋磯田順子選手の引退で、自分以外は全員男性部員になり、居場所がなくなるのではと不安になったためだった。

「部員には『さやかあさん』から転じて『かあさん』とも呼ばれていました」

「そんな時、選手たちから『やめないで下さい』と言われ、水泳部の記憶や選手の感謝の言葉が甦ってやめられなくなりました」(選手側の本心は記録係の不在を回避するためもあったらしいが……)

絶対的な信頼の証である。

自身も水泳を3歳から始め、高校時代はインターハイに出場した。大学では水泳部のスタッフとして選手の水泳を指導したり、体調管理を

「そして、昨春には、新女性マネージャーが誕生した。

栄養士と行った。大学の講義も選手のリ

ラックス法のヒントにしたという。ほほ毎日の練習。プールサイドに14時間いたこともある。選手とは一心同体。

「練習で頑張っても結果がでないとかやしい。逆に、いい結果が出る」と自分のことのようにうれしい。とりわけ、ケガをしている選手が全力で泳いでいる姿を見ていると涙が出てきてしま

**強豪水泳部の花一輪マネ**

文学部

池田早耶香さん

今後は心理力ウンセラアの資格を得るため、

「練習で頑張っても結果がでないとかやしい。逆に、いい結果が出る」と自分のことのようにうれしい。とりわけ、ケガをしている選手が全力で泳いでいる姿を見ていると涙が出てきてしま

「そんな時、選手たちから『やめないで下さい』と言われ、水泳部の記憶や選手の感謝の言葉が甦ってやめられなくなりました」(選手側の本心は記録係の不在を回避するためもあったらしいが……)

そして、昨春には、新女性マネージャーが誕生した。

栄養士と行った。大学の講義も選手のリ

ラックス法のヒントにしたという。ほほ毎日の練習。プールサイドに14時間いたこともある。選手とは一心同体。

「練習で頑張っても結果がでないとかやしい。逆に、いい結果が出る」と自分のことのようにうれしい。とりわけ、ケガをしている選手が全力で泳いでいる姿を見ていると涙が出てきてしま

「そんな時、選手たちから『やめないで下さい』と言われ、水泳部の記憶や選手の感謝の言葉が甦ってやめられなくなりました」(選手側の本心は記録係の不在を回避するためもあったらしいが……)

そして、昨春には、新女性マネージャーが誕生した。

栄養士と行った。大学の講義も選手のリ

ラックス法のヒントにしたという。ほほ毎日の練習。プールサイドに14時間いたこともある。選手とは一心同体。

「練習で頑張っても結果がでないとかやしい。逆に、いい結果が出る」と自分のことのようにうれしい。とりわけ、ケガをしている選手が全力で泳いでいる姿を見ていると涙が出てきてしま

「そんな時、選手たちから『やめないで下さい』と言われ、水泳部の記憶や選手の感謝の言葉が甦ってやめられなくなりました」(選手側の本心は記録係の不在を回避するためもあったらしいが……)

(福田)



# 情

報工学科から、卒業後、テレビ番組制作会社へ進む。

「忘れもしないワールドカップの

年(02年)、ある有名テレビ局の看

板番組のオーディションを受けたん

です。番組内で放送作家を育てると

いう企画の人選でした」と振り返る。

受かった、のである。「企画のた

めに用意された部屋で、それから飲

まず食わずの生活が始まりました。

週1で企画書を書き上げて提出して、

採点されるんですよ。その点数に比

例して食事のランクが変わるってい

うシビアな企画でした」

いまは汐留の某テレビ局の看板番

組、あっさりいえば、かの「電波ナントカ」ですか？

「ええ、生活をそのまま放送され

ていたので、見た人もいるんじゃない

いかな、すごくツマライ人がいる

なあつて思った方もいますよ、きつ

と」

有名人じゃあないですか。

「いやあ、当時、僕自身も気づい

ていたんですよ、

ものすごくツマ

ライ、全然面

白くないものを書いているなあつて。

中学生の作文と変わらないことを書

いているんですよ」

自嘲ぎみに言って、

「でも作品1本を考

えているときに、『こ

うやつたらあいつ笑う

んじゃないかねーかなー、

喜ぶんじゃないかねーか

なー』とか、そういう

ことを考えるのがすご



く楽しくなってきたんで「す」

結局、2年後、人生の

選択として選んだのがその因縁の番

組制作会社というわけなのである。

どんな企画、番組作りが目標です

か？

「ただ単純に笑えたりするもの

ではなくて、困っている人の肩を

ポオンと叩く、背中を押してあげる

感覚だとか、元

気になるような

ものを作りたい

な、というのがあつて、それがドラ

マをやりたい、という気持ちになり

ましたね」

笑顔で続けた。「うーん、でもやつ

ぱり有名になりたい気持ちが強いか

な」

番組制作会社の仕事はきつくて有

名ですが？

「そうなんです。3日間家に帰

れない。3日間寝られない。同期の

誰よりも給料が安い、諸々。会社訪

問のときに色々聞かれました。でも10年後を常に意識して、そのとき

までに今の自分の理想像に近づいて

やりたことができていいるならそれで

いいかな、と」

じつのところは、

「10年後に何をしているか、何が

できるかわかりません。だから、有

名になりたいだとか、人の背中を押

すだとか、そういうことはエラくな

るまで、自分が、心に閉まったまま日々、

精進ですね」

自分に厳しい、素晴らしいです。

「あ、すいません、そろそろバイ

トがあるんで……」

忙しいですね。

「某有名カラオケ店でいま働い

ているんです。『あの吉原も実は昔

こんなバイトをしていた』っていう

苦労話のネタ作りのためですよ。僕

の半生をつづるドラマを作るときに

使えますよ」

コロンでもタダじゃ起きない、の

心意気である。(古賀)



## 女子

陸上部にあって4年間、輝き続けた。女子走幅跳と三段跳で2年連続日本一に。

幅跳は中学生のとき、三段跳は高校3年のときにはじめた。やり始めると記録がどんどんあがっていった。幅跳という種目を本人はこう話す。

「1センチという世界の勝負。もう少し足を伸ばせば記録が伸びる。もうダメだという限界のない種目」

自己ベストは三段跳13メートル50センチ。三段跳を始めた頃は12メートルくらいだった

という。1メートル以上記録を伸ばし続けている。

意外にも日常はマイナス思考、だという。しかし、試合は違う。

「プラス思考が勝つ。自分が主役と思っっている。その他大勢になりたくない」。自信がほとばしる。

吉田さんにも伸び悩んだ時期があった。大学1年のときだ。自信をなくしていた。そんなときに支えになったのが当時4年でキャプテンだった井原福代さんだ。吉田さんにとって雲の上の先輩だった。練習の仕方、考え方において参考にすべき

人だったという。そして全日本インカレ・走幅跳で井原さんが1位、吉田さんが2位、ワン・ツーで飾った。戦う相手、ライバルは?

「負けたくない相手はいますよ。けど、ほんとは自分なのかな」

いまの目標は3段跳びの日本記録保持者、花岡麻帆さんだ。同じ成田高校出身という。

4年次は主将もつとめた。「自分がやってみせれば、見てくれる人はい」との気持ちで、1学年10人程度

### ホップ・ステップ・日本一 アテネめざして

文学部

吉田文代さん

いえる部員たち。

陸上を通して考えたこと。「何事も諦めない限り可能性はある。自分に限界を作らないこと」

卒業記念に、ホノルルマラソンにいったそうだ。

「アテネを目指します。いまの段階では代表に選ばれる確率は50%以下。出たいだけじゃ無理。目標が低いと成果は出せません。アテネで入賞を目指します」

(小野)

## 4

月からSEとして神奈川TOYOTAに入社する。

SEになろうと思ったきっかけを教えてください。

「1年ほど前から。身近にSEを目指している先輩がいらっしやって、その先輩から、『SEとは何なのか』というところから教えてもらったんです。この先輩は結局SEにはならなかったんですけどね」

金井さんは物理学科ですよね。すぐには結びつかないような。

### 物理学と書とSEの関係

理工学部

金井明子さん

「そうですね、物理学科とSEは関連がないですね。一応プロ

グラミングは2、3年の時に授業でありましたが。でも不安はありません!むしろ楽しみなくらい。強気で向かっていこうと思っています」

すこしプライベートなことも、と持ちかけたら、「趣味ですか」と言っ

て、「書道」の話になった。「このあいだ師範の資格もとったんですよ」

と。もう「趣味」の域を超えている。書道を始めたのは幼稚園からだそうだ。「途中ブランクがありました。少しずつと続けています。私

の所属している支部では幼稚園、小学生、中学生、高校生以上などと年齢別になっていて、高校生以上からは本格的な書道となります」

3人姉妹で、そろって書に向かう。手書き・タテ書きの「書の世界」とバーチャル・ヨコ書きのIT世界。△静▽と△動▽、あるいは△寂▽と△騒▽、対照の妙である。

「はい。仕事を始めても続けていくつもりです。そして老後は書道教室を開きたい。一度、先生というものを経験してみたいと思っています」

老後でいいですけどね、と言っているんです」

笑った。

「近いところの夢は?」

「自分の車が欲しいですね。神奈川TOYOTAも社割りが使える!というところがポイント高かったんです。今はお金がないので買えないけど、これから働いて、社割りで買う!!」

社割りって、後輩には効かないのかしら?ナンテ、さすがに聞かなくていいけど。(橋本)



「で もね、もともとは引つ込  
み思案な性格だったのよ、  
私」

なにかかつがれたような気分。

ノートのメモ書きを見直した。イン  
ターンシップ、フィリピンでのNG  
O活動、W杯のsampoツアーの企画、  
フィジー・トンガでのワールド  
ワーク……。海外も駆け回った活動  
の記録が並んでいる。なのに、引つ  
込み思案だったなんて。

「うーん、1年生の時は大学生活  
に慣れるので精一杯だったし。何か  
をしたっていう気持ちだけが漠然

とあって……。でも何を  
していいかわからない状  
態だった、かな」

「転機は1年後にやってきた。外交  
官になるための勉強をしたくて入っ  
た外交研究会や、前述の「sampo  
ツアー」の企画メンバーと出会って  
強烈な刺激を受けたという。

「大学の中にいるだけじゃダメ  
なんだ、何かしなきゃ始まらないん  
だつて、思ったの」

行動しなければ  
始まりません。  
単純で簡潔な答

えが、「引つ込み思案」な熊倉さん  
のを背中をどんと押した。

特に心に残っているのが、今年の  
夏休みに行ったトンガとフィジーで  
の経験だという。フィジーの人は気  
さくでノリがいい。公園で初対面の  
人が、話すうちに「うちの村に泊ま  
るとイイよ！」と招待してくれた。

訪れた村は、電気も、ガスも、水道  
もなかった。でも、村人たちの温か



い心が身にしみた。「見  
知らぬ外国人の自分を大  
歓迎してくれたのよ」と

熊倉さんは「南半球うるるん紀行」  
の感動を語る。

就職活動も「熊倉流」で突き進んだ。  
国際コンサルタント業界に的を絞つ  
て活動していたが、この業界、新卒  
採用はゼロに近い。最低でも修士課  
程を修了し、それから数年の経験を  
積んで採用の入り口に、という世界

マルチ体験生がしてアツティブな一歩  
法学部 熊倉由子さん

らしい。  
だが、という  
のか、だからこそ、

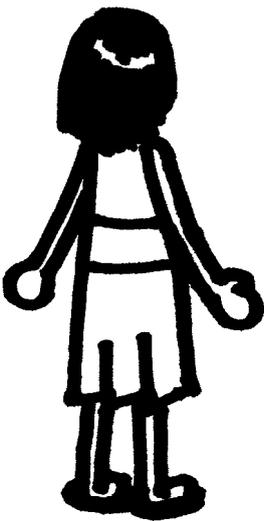
か。この人は国際コンサルタント系  
の企業にメールで

猛烈なアタックを  
かけた。片端から  
門前払いにもめげ  
ず、粘りに粘った  
末にたった1社だ  
け、面接にこぎつ  
けることができた。  
感じのいい社長さ

んだつたが、ここでもやはり「新卒  
は……。すかさず「じゃ、チャン  
スを下さい！」と食い下がった。一  
度食らいついたら……。離さない。ま  
るでスッポンのよう、と言いかけたら、  
「非常識だねって、誉められちゃつ  
たの」と笑った。何事も前向き。採  
用が決まった。

「何年か経験を積んだら、今は  
別々の分野に散らばっている友達を  
集めて会社をつくりたいな」

有言実行の人である。ポジティブ  
に、広い国際社会の舞台に向かう。  
(谷)



「えっ、授業？ そうだなあ、年間10回ぐらいしかでてないんじゃないかな」

サークルが忙しかったようである。番組発表会の映像編集で、サークル棟に10連泊したこともあるという。

1、2年では映像作り一本だったが、3年になってCHKへの接し方が変わってきた。映像リーダーと、年に2回行われる番組発表会の実行委員長になり、サークル全体を考えるようになったからだ。

数々の企画を考え実行して

**放研とともに、笑顔の総括**

法学部

小松祐介さん

「結局自分は映像制作というクリエイティブな面よりも人を動かしたり運営したりという方が好きみたいです」

これは映像技術をまだ持たない後輩に、小松さんが指導しながら一通りドラマ制作をさせる。これによって後輩たちが一通り映像技術を学びつつ、部員の関係も良くなるというわけだ。

「前年まで、映像技術を持つ人がコンテンツを作り、その発表会で運営までもして、すごく負担が大きかったわけですよ。みんなが技術を持ち作品を作っていけば、運営面で余裕もできるんです」

後輩の柳下絵美さん(法2)は「実

力がある人でそれを後輩に提供してくれた。後輩とすごく仲がいいんです」と語る。

3年のピーク時は睡眠時間3時間。冬の番組発表会が終わったあとは「もう、抜け殻」。

1月末から就活が始まった。新聞社や番組制作会社を受けたが、「自分のしたいことじゃない」と感じ始めた。朝日新聞の面接ではやりたいことと違うとわかった瞬間、辞退。

**笑顔を総括**

「結局自分は映像制作というクリエイティブな面よりも人を動かしたり運営したりという方が好きみたいです」

就職先は映画や音楽をつくるエンターテイメント会社。資金集めや営業担当する。

映像という1つのことに集中した結果、派生してくること(著作権や民法など)を学んだ。さらには自分についても。

「悔いのない4年間で納得の笑みが浮かんだ」

(西原)



**清**

水さんも同じCHK所属。小松さんの「10連泊仲間」でもある。小松さんが「後輩のために尽くした」人とすれば、清水さんは「マイペースに自分のしたいことをやってきた」人だ。

取材にはスーツ姿、メガネで現れた。186センチの長身。学生にはちよつと見えない。しゃべりも感情を表に出さない。好きなタイプは？

「頭のよい人、マイペースにいてきてくれる人」

**放送脚本家の「非日常」**

文学部

清水厚志さん

「言いたいことは「日常」。日々考えていること」

「頭によい人、マイペースにいてきてくれる人」

みたいに、ネ。清水さんの経歴は一風変わっている。もともと信州大学の工学部に通っていたが、ラジオの「ハガキ職人」で自分のアイデアで人を楽しませることを覚え、中大文学部に入り直した。

最初はバラエティードラマのシナリオを書いていた。しかし次第にラジオドラマのシナリオを書くようになった。

(西原)

「ラジオドラマは音声だけなので、作品の幅がぐっと広がるんですよ。世にも奇妙な物語風だったりSFタッチだったり」

2年次、関東大学放送コンテストラジオドラマ部門で優勝。続くNHK全国大学放送コンテストで準優勝。3年次には同コンテストで優勝を果たした。それぞれの作品には共通点がある。ストーリーは「非日常」だが、

「ぼーっと考えていることが多いですね。授業中とか電車の中とかよく人間観察をしています。友人からは「カンがするぞい」と言われるのだとか。

4年の夏まで作品作りをしていた。まだ就活中である。「あせりはないですね。どこに就職しても、趣味でシナリオを書くことは続けていきます。やはりマイペースであった」

# 赤

メガネに目の覚めるようなオレンジのダウンジャケット姿で、彼はやって来た。

文学部の大日向宙さんだ。SG(英

米文学専攻の新入生指導学生)を3年間つとめ、最後の1年間はリーダーとして右も左も分からぬ1年生をサポートした。学年関係なく、みんなからオビ、と親しまれている。

SG生活を振り返って特に大変だったのは、

どんな時でしたか？

「最初に『意見は本音で』と言ったら、不満の言い合いになってしまったってりあえずオビまかせていう空気だった時かなあ。自信もなく



してたし」

そんな状況を打破したのは、現リーダーの内山

拓也さんだった。

「みんなオビに甘えすぎだ！」

みんなの心の声だったのでは、と振り返る。この一喝から意識が変わった。気が付けば、みんなが一つになっていた。

## 新入生励ましのSGオビ節

文学部

大日向宙さん

「感謝って、それを期待していないときにされる」と、余計うれいんだ」

そう熱く語るオビも、今春から西

濃運輸の一社員となる。環境問題で悪者になりがちなたラックの地位向上を目指すという。

では、後輩に一言！

「大学は、入って何をしたがが大事。何か、〃ひとつ〃を見つけてほしい。今、どれだけ学生ライフを満喫してるかで勝負しよう！」

昨年春以来、またオビ節に励まされてしまいました。(津江)



# 感

覚というか本能が先に惹きつけられてしまうことがある。旅

行人・日高信子さんに

とって、それは「中国」だった。屋台がひしめき合う市場を歩き、大衆食堂で庶民料理をほおぼり、身に付ける服は現地で安く買ったモノ。気が付くと、日本人であることを忘れそうなほど、どっふりと中国に浸かっていた。土地の雰囲気肌に合ったのだろう。

「だって、ラクなんだもん」。法学部

中国大好き、

法学部

が、一段の笑顔に。

中国語はペラペラ。「特技は中国人のマネをすること」だなんて、まさかと思っていたら、本当になりましたことがあるらしい。

現地中国のさる駅でのこと。向こうでは列車の切符を購入する際、外国人はパスポートを提示しなければならぬ。値段も現地の人より少々高めである。これはもう、やるしかない！ そしらぬ顔で中国人用カウンターに近づき、得意の中国語で行

き先を告げた。言葉は流暢だし、顔立ちも同じアジア系——結果は完璧な勝利だった。

こんな風にして3年間で6回の

海外旅行、加えて勉強にサークルに……時はあつという間に就職活動の時期に突入。次第に周囲がピリピリとし始めていく中で、「好きなことは我慢したくない」と、台湾にも行ってきた。それも就活真っ最中の4年の夏である。

ホッケーサークルの合宿にも参加した。1カ月前

ホッケーも

日高信子さん

いまには、就活スーツを着て東京と合宿所を往復したりもした。

ようやく就職先が決まったのは、冬も間近な11月の初め。多少のことではうるたえない日高さんも、内心は不安で堪らなかつた。焦りもあつた、という。それでも――。

好きなことは我慢しない。そのかわり、やるべきことはきちんとする。包みこむような優しさの奥に……強くしなやかな意思が垣間見えた。

(谷)

# 在

学中、関東学生剣道大会で優勝(団体)を2回、新人戦では3連覇を達成。さらに、インカレ(団体)では2位を1回、インカレ3位を2回。個人でも関東学生剣道選手権大会3位(2年次)、インカレ3位(4年次)など、常に輝かしい成績を残した。4年次は主将。

兄の影響で始めた剣道で、小学校時代、三連覇を成し遂げた。高学年で野球に興味を持つが、中学入学と同時に剣道を再開。高校時代にインターハイで優勝し、中大へ入学。しかし、強者揃いの中大では、1年次の最初の大会に、部内戦で敗退し、出場できなかった。初めての挫折。

「高木友之助・中大前総長の言葉である『一生新人』を座右の銘に、常に油断しないようにした。だから、大会の団体戦で、勝負の掛かった試合には負けたくない」  
特に、対外試合については、

「64人の部員中、試合に出場できるのは7人。出場できない部員の方も勝たなければならぬし、負けても納得できる勝負をしなければ」と

心構えを語る。しかし、唯一、納得いかず負けた試合がある。

「今年(03年)の新人戦は4連覇が掛かっていた。選手は精一杯やったけど、自分がやっていたら、勝っていた。自分が後輩を育てられなかったなと感じました」  
大学生活を振り返って、

「他大と比較して、中大が一番いい大学だと思う。教授たちも協力してくれ、勉強もスポーツもできる環境にあった。(難しいといわれる)民法特講でもAを取れたし」  
満足の笑みを浮かべて、

## 「一生新人」剣道の道 上原祐二さん

法学部

「剣道部の『親しき中にも礼儀あり』という雰囲気も良かった。剣道部長の津村教授の個性を引き出す指導は部員や自分をさらに強くしてくれた。剣道が強かったことで、人生で一番目立てたし、自信ができた」という。

就職先は富士ゼロックス。就職後も「一生新人」を心に留めて。何でもやらせてくれた両親に感謝したい、と最後に言い添えた。

(福田)

# 中

大に弓道部あり、である。03年の成績だけをとってみても、

全日本選抜大会優勝(6月)関東リーグ2年連続優勝、11月の全日本学生弓道王座決定戦優勝・東西学生対抗試合優勝。チームの牽引役であり続けたのが佐藤裕樹さんだ。「(的に)中たつてあたりまえの連中」の中にいた。弓道部は男女合わせて30人ほど。高校時代に弓道を始めた。祖父がやっていたのがきっかけだったという。初めて放った矢は直径36センチの的をかすることもなく、壁に飛んだという。

## 連覇の弓道部…静寂の野精神統一 佐藤裕樹さん

商学部

弓のサイズは並、伸、伸々とあり身長によって決まる。9キロから18キロ。佐藤さんが扱ったのは17キロの弓。まともに的中するようになるまで3カ月かかった。

1日60本放つことを日課とした。弓道は1日練習を休むとカンを取り戻すのに3日かかるといわれる。いままで放ってきた矢の数は2万をゆうに超える。日々の練習量

と類まれな集中力で佐藤さんは腕に磨きをかけたのだ。

弓道の楽しみを「的に中るのはもちろん、静寂の中で精神統一ができること」と話す。

弓道を繊細なもの、とも言う。敵は自分の中にいるという。自分たちの中を見つめてどれだけ力を出せるかが、勝負を決める。

中大の強さの秘訣は日本一の環境であった。石川武夫師範は範士である。範士は全日本弓道連盟の称号で、弓道8段となつた後さらに8年以上の修行が最低要件。師範の指導は分かりやすく、噛み砕いて教えてくれる。「スゴイ」としかいいようがない」と佐藤さんは話す。

大学にもう1年、残る。公務員か一般企業か悩んでいるという。併せて、女子弓道部のコーチを引き受けた。こんどは教える立場に。「女子は2部リーグで低迷しているが、伸びる要素はある。1部昇格が目標」と意気込み十分である。(小野)



「変 わろうと思えば変わるものだと思った」

永山さんは当時は懐かしそうにこう振り返った。

永山さんと縄島さんは女子ソフトボール部の同期。永山さんは主将をつとめポジションはセカンド、縄島さんは副主将でピッチャー、と女子ソフトの二本柱だった。

彼女たちの代は、同学年は2人だけだったそうだ。

就職の氷河期ならぬ、部員氷河期である。当然ながら、レギュラー争いはなかった。

しかし「レギュラー争いが無いことを、強くなれない理由にはしたくない」と大改革を行った。たとえば、参加者が少ない「夜練」を「朝練」に代えたり、練習メニューを工夫したり。部のまとまりがよくなり、総勢13人ながら昨春秋は関東2部・3位。上位をうかがうところまでに。

女性ながらに思い切りの良さ、豪

快さを感じさせる二人なのである。根っから「人が好き」。だから、みんなと一緒にやることも、なのだろう。

永山さんは夏、農業インターンシップに参加、北海道で2週間、30人と一緒に生活をした。そしてこれから人材開発の道を目指す。

縄島さんは損保会社へ。「コーチ

**女子ソフト13人を率いた 豪快コンビ**

文学部

永山美緒子さん  
縄島弘美さん

として人の挑戦を後押ししてきたことが、とても印象に残っている」

と話した。これから「自分の力で人を喜ばせることができるような仕事がしたい」と。

同じチームに所属し、ポジションも役割も違った二人が卒業して選ぶ道はそれぞれだが、二人のペースとなっているもの、また目線の先にあるのもやはり、「人」であるようにみえた。

(可知)



「直 感でこのサークルしかないと、確信しました」

雰囲気は一目惚れ。入学式翌日、陶芸研究会へ。見ため穏やかでかわいらしい斉藤美穂さんだけど、

「第一印象はずしません」。

その後、茶道会と掛け持ちすることに。抹茶がどうの、より、ひとつひとつの作法に味わいを感じたという。

「母は書道の先生で、和裁も得意です」

なるほど、

「和」の血筋なのかと思うところが、一方でフランス文学専攻でもある。

「めざすのは国籍のないもの。誰かが認める、本当に良いものを」と言う。

「陶芸もそうですが、ふだん目の前にあるものの元の姿や、かたち作られてゆく過程が、見ていて楽しい」とも。

原点をみつめる。斉藤さんの、もとの関わり方はていねいである。

卒論でとりあげたのは、スイスの

彫刻家、ジャコメッティ。どんな人？

「見たものを忠実に再現する。それゆえ作品は、ゴツゴツしていても針のように細い。大きさは、マツチ棒以下になることも」

ものの本質を捉えようとした彫刻家。なにか斉藤さんと通じるところがあるような。

就職活動のときも、大切な眼を失わなかった。

「仕事は、いずれ定年などで引退するものと決まっている。でも、わたしは、やるなら一生続けたいと思うんです」

**陶芸から着物職人への道 斉藤美穂さん**

文学部

斉藤美穂さん

4月に就職活

動を中断。雑誌でみつけた、きもの仕立て屋に思い切つて電話した。募集はなかったが、採用が決まった。和裁を習いはじめた。

「和裁士なら生涯の仕事にできる。なにより惹かれるのは、洋裁とちがいで、和裁は余り布が出ないこと」布からきものを仕立てるばかりでなく、古いきものの修理もする。良いものをいつまでも大切にしている。いてほしい。

(江部)

「全国行くような部活の部長って大変ですよ。」そう聞くと、

「大変だったのかな。うん、大変だったかもね。でも、大変じゃないようにがんばってきました」

今年度、第51回全日本吹奏楽コンクールでみごと金賞を受賞した吹奏楽部部長の村上泰之さん。

おっとりした語り口。「ぼく、口下手なんですよ」と言いながら。

4年のときは、午前に就職活動、午後には部活の練習、そして授業にバイトというから、「大変」じゃなくても「楽」ではなかっただろう。

中央大学吹奏楽部は名門である。CDも一般のCDショップで売られている。中大吹奏楽部に入学してウデを磨きたい、そんな一心で入学してくる人も多いらしい。

村上さんは、どうでしたか？  
「ぼくの場合はたまたま、ですね。大学でも続けたいとは思っていただけ、中大だったので強かった、というだけ。」

ステージに立ったときって、スポットライトを浴びたり、拍手をもらったりとかなり充実しているから、

それをまた経験したかったんだよね」吹奏楽との出会いは中学のとき。せっかく高校時代も続けてきたのだから、大学でもやってみようか。軽いニュアンスに聞こえる。

が、大学での経験は特別、だったようだ。

「大学にいる4年の間に、2度と一緒にステージに乗れない人たちとステージをやるわけですよ。学生には卒業があるから。『幻の音楽』と学生指揮の猪口正臣君が言っていたけど、そのとおりだよ。学生時代を逃したら、

引退してみても続けた。」

「いま、しみり感じるんだよね。1度きり、2度と同じメンバーで吹くことはできないけど、それがまたいいなって」

卒業後はこの中大の職員になることが決まっている。広いキャンパスのどこかで、在校生は姿を見かけたり、あるいはお世話になったりするかもしれない。

（町田）

それをまた経験したかったんだよね」吹奏楽との出会いは中学のとき。せっかく高校時代も続けてきたのだから、大学でもやってみようか。軽いニュアンスに聞こえる。が、大学での経験は特別、だったようだ。「大学にいる4年の間に、2度と一緒にステージに乗れない人たちとステージをやるわけですよ。学生には卒業があるから。『幻の音楽』と学生指揮の猪口正臣君が言っていたけど、そのとおりだよ。学生時代を逃したら、引退してみても続けた。」

「幻の音楽」吹奏しながら  
村上泰之さん

代を逃したら、こんな経験はできない」



第51回全日本吹奏楽コンクール「金賞」のがい歌  
右から、部長・村上泰之、学生指揮者・猪口正臣（文学部）、  
渉外・池戸豪（法学部）の3君。ともに4年生



# 卒業生



文学部 関坂典生  
|| 4月から、「日本農業新聞」記者



法学部 長野佑介  
|| 「朝日新聞」東京本社記者



商学部 三神和晃  
|| 「上毛新聞」記者



法学部 渡部一実  
|| 「産経新聞」東京本社記者

# 学生記者

法学部3年 江部理恵

総政学部 小野光雄

文学部 酒井まりえ

文学部2年 可知美沙子

理工学部 古賀清人

同 橋本奈緒美

同 原田成

経済学部 西原香保里

法学部 福田成幸

法学部1年 谷ちひろ

商学部 町田梨絵

文学部 津江瞳